

感謝箱献金だより

ガラヤのほとり 21 号

感謝箱献金事務局（コア）〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町 14-57 横浜聖アンデレ教会内
TEL/FAX 045-620-8282 E-mail:kansyabako@grace.ocn.ne.jp



「嘆きや悲しみを喜びに変えていくために」

東京教区主教 アンデレ 大畑 善道

東京教区の中で教区婦人会が解散して久しくなります。そこで日本聖公会婦人会には個人参加という形になりました。そんな教区の主教が何か、日聖婦のお便りに書くのも不思議なことです。がお許しください。言い訳になるかも知れませんが、東京教区の中では毎年、被献日の礼拝を守り感謝箱の運動を個人単位で続けております。そしてそれは女性だけではなく、教会に集う人が枠組みを超えてしてきています。

感謝箱献金の運動や組織がいろいろ変化するのは仕方がないことかもしれません。教会や教区の中に婦人会が解散したとしても、日々の祈りの中で、教会に集う者が神様に生かされていることをどのように表現しようかと頑張っておられることと思います。豊かな牧会、力強い宣教をする担い手は私たち一人一人です。教会の現状は非常に厳しいものがあります。良く聞く声は高齢化し、礼拝出席者も減少し、若者も教会から離れて、あれもない、これもないという声ばかりです。宣教してもその成果も少しも目に見えない。マイナスの声ばかりが大きくなっています。そこで私たちは意気消沈するわけにはいきません。

聖書は私たちにどのように呼びかけているのでしょうか。バビロンの捕囚から解放されて帰国した民のつぶやきがイザヤ書の中にあります。輝かしい未来を夢見てきたのに現実には予想を上回る厳しさでした。彼らは言います「主の手が短くて救えないのではないか。主の耳が鈍くて聞こえないのではないか」(59:1)。主に対する信仰まで揺らぎ始めます。これに対して、問題は主にあるのではなく、あなたがたにあるのだと預言者は語ります。「お前たちの悪が、神とお前たちとの間を隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させ、お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ」(59:2)。イザヤは続けます。神は困難の中にあるあなたがたを慰めるために私を立てられた。良い知らせを伝えるために私に言葉を与えられたと慰めます。神の言葉に信頼していきなさい。神は灰に代えて冠をかぶらせ、嘆きに代えて喜びの香油を、暗い心に代えて賛美の衣をまわせてくださる。(61:4)福音が嘆きや悲しみを喜びに変える。主は悲しんでいるあなた方に、喜びの冠を与えると云われます。私たちのその働きはそれぞれ異なっていますが、私たちの目標、信じていくことは一つです。お互いを信じて神が私たちを選び、派遣して下さっていることをしっかりと心していきたいと思えます。悲しみ嘆きの中にある人々と共に歩むことができるときに、聖書のみ言葉が実現します。この御言葉を実現させるために私たちは招かれています。感謝箱の運動がその一つとして神に祝福されますように。神のみ言葉をかみしめて、この運動を推進させてまいりましょう。

恵みの風を受けて



お献げ先からの報告のコーナーです。今回は「リフレッシュ・プログラム」
「聖地ろうあ子どもの里」「リグリマ・ジャパン」「可児ミッション」の近況をお伝えいただきます。

リフレッシュ・プログラム

『子どもたちの笑顔』

原発と放射能に関する特別問題プロジェクト
スタッフ 佐々木 康一郎

福島県郡山市にあるアパートからオフィスまでの道中、汚染土を入れたたくさんのコンクリート製の容器を見かけます。それは公園の脇、駐車場の隅であつたり、家の庭先、またはアパートの敷地内の小さなプレハブ小屋のなかであつたりします。本当に至る所にあるのです。また、毎朝、そして帰宅後にテレビを見ていますと、天気予報の後には一日の放射線の空間線量値が放送されます。さらに、散歩でよく行くアパート近くの公園には放射線の数値を表わすモニタリングポストが置かれています。このモニタリングポストは福島県全域で約 580 台設置されています。信じられないかもしれませんが、これが原発事故から現在までも続いている日常なのです。



* 町中の駐車場の隅にある汚染土



* 公園に設置されたモニタリングポスト

事故から 4 年 8 カ月が経ちました。テレビや新聞等では、もはや原発事故関連のニュースはあまり取り上げられなくなってきております。復興への取り組みなどが多く報道される中、この地に住まう多くの方々の思いや不安、そして現状を知る報道はあまり見受けられないのではと感じています。しかし、多くの人が今もなお放射能による影響に、そして将来に不安を覚えながらも生活しているという現実、そしてその現在がある^{いま}ということをおわたしたちは忘れてはいけないと思うのです。

このような状況の中で日本聖公会婦人会のたくさんの方々からの祈りと支え、そして何よりも覚え続けて頂いているという事は大きな励ましです。



福島県猪苗代町にある亀ヶ城公園でかけっこ

この度、感謝箱献金からお献げ頂いた献金は「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」の支援活動の大切な1つであるリフレッシュ・プログラムに用いさせていただきました。このプログラムは、放射能による影響から外で思いっきり遊ぶことが出来ない子どもたちに満足ゆくまで、自然を楽しんで欲しいという思いから、郡山セントポール幼稚園、小名浜聖テモテ幼稚園の園児を対象に実施しています。子どもたちは、土をこね、泥んこで遊んだり、川で水に触ったり、魚をとったり、葉っぱを集めたり、虫に触れたり、野原を駆け回ったりなど、自然に触れることが大好きです。

また夏休みには園児だけではなく、卒園児や保護者も対象とした家族での旅行や子どもたちだけのキャンプ、沖縄でのホームステイにも送り出すことが出来ました。



公園内で紅葉についての説明を聞く様子



自然の中で食べる流しソーメンは味も格別♪



郡上八幡での子どもキャンプ



長崎の海辺にて



沖縄の自然と、温かい人々との出会い

幼稚園の園外保育での自然と触れあう子どもたちの笑顔は本当に輝いています。そしてその笑顔を見守る保護者の方々のまなざしのなんと嬉しそうなことでしょうか。これからも子どもたちが笑顔でいられるように、皆さまのお祈りとお支えの下、一緒に歩んでまいりたいと思っています。この度の感謝箱献金からの支援に心から感謝を申し上げますと共に、これからもどうか皆さまが覚え続けて下さり、お支え下さいますようお願い申し上げます。



恵みの風を受けて

聖地ろうあ子どもの里 (HLID)

『新しい50年に向けて』

「聖地ろうあ子どもの里」
里親の世話人 セラー 吉松さち子
(東京教区聖オルバン教会信徒)

「聖地ろうあ子どもの里」の近況

ヨルダンの古都・サルトにある耳の不自由な子どもたちの施設「聖地ろうあ子どもの里」(The Holy Land Institute for the Deaf、以下HLID)は2014年4月、創立50周年を迎えました。

記念式典には日本からも私を含め6人が参加しました。

聖公会中東エルサレム教区が1964年に設立して以来、幾多の困難を乗り越えて、今では中東有数の施設となり、3歳から18歳までの子どもたち250名が寮生活をしています。入寮者の中には、いわゆる三重苦の子が10人います。現在も入寮待ちの子どもたちが数多くいると聞いています。

施設長のBr. Andrew以下教職員も50名を数えます。その大部分は地元の人たちで、校長など数名を除いては殆どがイスラム教徒です。

Br. Andrewの働きで、ここ数年間に施設の増改築や研究所の充実を諮り、補聴器の研究開発では指導的な地位にあるということです。

日本聖公会婦人会の皆様にはこれまで多額のご支援を賜りました。このご支援がBr. Andrew以下施設の関係者をどれほど力づけて来たことでしょう。心から感謝し、篤く御礼を申し上げます。この機会にHLIDの近況をお知らせしたいと思います。

手話辞典の作成

50周年を記念して「ヨルダン方式による手話辞典」が完成しました。

長い間関係者の切望していたものです。この辞書の出版には、米国のニューヨークの「聖公会援助会」、デンマークの2つの団体およびヨルダンのアヒリ銀行から援助を受けました。



発行された辞書を手に… (HLID Websiteより転載)

施設の拡充計画

HLIDの隣は製薬会社の工場でしたが、数年前に閉鎖しました。Br. Andrewは現施設が手狭になったため、かねてからこの跡地を購入したいと話していました。ヨルダン国王の叔母や、皇室関係者のご尽力により、このほどこの土地をHLIDが譲り受けることが出来ました。これにより敷地は現在の倍となり、今後施設のいっそうの働きが期待されます。



寮生と共に遊具で元気よく遊ぶシリアからの子どもたち



分校「ジョフェ」でイギリスからのボランティアと首都アンマンの聖公会の人々による英会話教室と音楽教室を楽しむ障がいのある子どもたち。

地域活動

HLID では、耳の不自由な人たちの教育をする教員や技術指導者の養成にあたるほか、地域での治療活動にも力を入れています。3年前からヨルダンの北部にあるシリアの難民キャンプ「ザアタリ・キャンプ」で週2回、耳の不自由な人々の治療をしてきました。途中資金不足のため、閉鎖しましたが、ドイツの「執事サービス」、イギリスの「サイード基金」がすぐさま援助の手を差し伸べ、この働きは現在も続行されています。小さいながら、視・聴力検査をする診療所もこの難民キャンプにはあります。

施設内の出来事

今年の5月、寄宿舎の外にある樹が燃え、大騒ぎになりましたが、幸いに子どもたちは無事でした。また8月には聖オルバン教会の信徒が里親となっている子どもが、プールで溺れて亡くなるという悲しいニュースも飛び込んできました。

2014年11月と2015年4月の2度にわたって教職員の給料が遅配するという事態が起きました。その都度、神様の助けにより乗り越える事が出来たということです。

Br. Andrew は諸会議に出席する他、資金集めのために世界中を飛び回る日々が続いています。

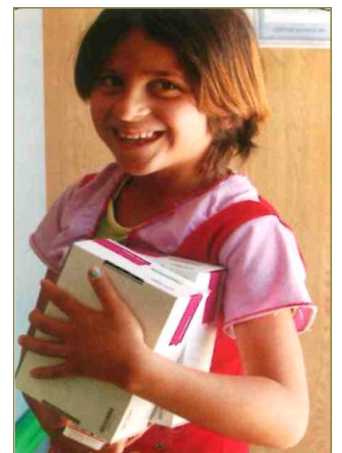
日本聖公会婦人会の皆様の今日までのご支援に重ねて感謝いたしますとともに、今後ともいっそうのご支援を賜りますよう心からお願い申し上げます。



「聖地ろうあ子どもの里」施設の庭に集う Br. Andrew と子どもたち、先生がた。

(© Saïd Foundation Website より転載)

The Holy Land Institute for the Deaf



新しい補聴器をつけて嬉しそうな難聴のマーワさん





恵みの風を受けて

リグリマ・ジャパン

『活動を支えるために』

リグリマ・ジャパン代表 上澤 伸子

リグリマは今年も日本聖公会婦人会からのご支援により、裁縫トレーニング、改良かまど、池の再生といったプロジェクトを実施することができました。現地では 2015 年 3 月に池の再生プロジェクトが開始されました。水道が普及していないバングラデシュ農村部では、池が人びとの生活を支えているといっても過言ではありません。ガロの人びとは、池の水を食器洗いや洗濯、水浴びといった生活用水として使います。さらに池で育てた魚を貴重なタンパク源として食べたり、市場で売って生活費の足しにしたりします。しかし、長年使っていると池の底に古い泥やごみが溜まって、魚が育ちにくくなり、洪水のときには水と一緒に魚があふれてしまうこともあります。

そこでリグリマでは、雨期の始まる前の 3 月に、洪水被害をもっとも受けやすいノルチャプラ・グループの 3 メンバーの池を再掘削しました。そのひとり、ノボニタさんの池は、今年も洪水によって水かさが増しましたが、その前に再掘削し土手を高くしたおかげで、魚は無事でした。3 人ともいろいろな魚を育てており、この秋に 1 キロ 200～250 円で売ることができました。



リグリマの裁縫トレーニングも今年で 8 回目を迎えます。今年のトレーニングは 7 月 9～15 日に北部のビリシリと首都ダッカで実施され、元青年海外協力隊の裁縫指導員にご指導いただきました。初心者がつくるアップリケ付き巾着袋のために、日本の生地を用意していったところ、浴衣生地に染め抜かれた蝶々やアニメのキャラクターを切り取って、すてきな巾着袋に仕上げてくれました。

7 月のトレーニングのあと、ガランプラ・グループのメンバーは、トレーニングで習った巾着袋やアップリケ付きのテーブルクロスを作って近くの店に売り込み、注文を得ることができました。またビリシリ・グループは品物の収益を、グループ共同で貯蓄しています。これまで裁縫初級者の間では、なかなか成果が見えてきませんでしたが、このトレーニングを境に、「やる気」のスイッチが入ったように見受けられました。それは、昨年 11 月の 10 周年記念集会のときに、自分たちの将来を話し合ったことや、感謝箱献金から土屋晴子さんが来られたことも大きな要因でしょう。

上級者向けの講習ではガロの伝統的な織物で巾着袋を作り、裁縫指導員が以前勤めていらした店へ、みんなで売り込みに行きました。みごとに製品の質は認められたようで、あとは、現地のリグリマ・メンバーだけで、受注・生産・品物管理・納品などをマネジメントできるかどうかにかかっています。まだまだ道のりは長そうです。



バングラデシュでは9月末から10月にかけて、外国人やマイノリティを狙った殺害事件が多発しています。事件後、バングラデシュに対する各国外務省の渡航警戒レベルが引き上げられたため、海外や日本の企業あるいは援助団体が出張を取りやめています。リグリマ・ジャパンも11月初めの渡航を中止しました。

みなさまにおかれましては、バングラデシュに住むクリスチャンや少数民族といったマイノリティの人の生活が守られるよう、日々の祈りにお覚えいただき、万が一のときにはお知恵を拝借できれば幸いです。

最後に現地ディレクターのラブリー・ダゼルさんの言葉で締めくくりたいと思います。「さまざまな形でわたしたちを助けてくださるリグリマ・ジャパンと聖公会の女性たちに感謝いたします。わたしたちはリグリマに関わることによって、自分たちにも何かできるのだと思えるようになりました。どうぞ、わたしたちのため、そして現在の状況のためにお祈りくださるようお願いいたします」

※12月16日に東京聖三一教会で報告会が行われ、コアスタッフ、チャプレンはじめ、横浜教区の信徒も参加しました。

日本聖公会婦人会のみなさま

リグリマ・バングラデシュからご挨拶を申し上げます。
みなさまは、わたしたちのもとに何度もちか子さんと伸子さんを送ってくださり、ガロの女性たちに愛と思いやりを示してくださいました。そのことに心から感謝いたします。

あなたがたの励ましによって、何人かのメンバーはミシンを購入し、子どもたちの服を縫うだけでなく、近所の人々の服まで縫えるようになりました。これまでは村の仕立屋さんにお金を払って縫ってもらっていましたが、いまでは自分で縫うことができます。これが家計の節約になるのです。また、あるメンバーは現在、お針子さんとして身を立て、一家の稼ぎ手となっています。

この数年間に、メンバーはさまざまなことを学びました。布の裁断方法、刺繍、アップリケ、ブロック染め、それからポーチ、巾着、ブックカバー、ブラウス、ワンピース、ペティコートの縫い方などです。みなさまのご寄付といつくしみの心にお礼を申し上げます。

愛を込めて

リグリマ・バングラデシュ代表
ラブリー・ダゼル

2015年7月29日に頂いたお手紙より



恵みの風を受けて

可児ミッション

『一人ひとりに寄り添って』

可児ミッション職員 赤坂 唯

昨年に引き続き、温かいお祈りとお支えを頂きましたことに感謝いたします。

可児ミッションには現在、外国にルーツを持つ子どもたちが約60名通っています。

4歳のJくんの家庭には0歳の赤ちゃんがいます。その赤ちゃんはフィリピンで生まれ日本へ来ましたが、在留資格に関する問題により、健康保険には未加入です。しかしこの子は病気にかかりやすく、病院へ行くこともしばしば。その際、医療費を全額負担しなければならず、母親が働けない今、Jくんの月謝を払うことが経済的に難しい状況にあります。

こうした家庭の子どもに対して、2万円の月謝の一部を補助する奨学金制度を設けています。その財源は主として皆様から頂く献金によっています。

可児ミッションに通う子どもたちの中には両親共働きの家庭が多く、降園後に知人や親戚の家に預けられ、テレビゲームをしながら両親の帰りを待つ子どもたちが多くいました。そのため可児教室では今年4月より、10時～14時の通常保育に加え、7時～19時までの延長保育を始めました。

この子どもたちは、長い時間教室にいるため、お昼寝の時間も必要になってきます。今までは古い布団が2枚しか無く、替えがきかずに洗濯も出来ないため衛生面でも心配でしたが、今回皆様から頂きました献金によって新たに購入させて頂き、清潔な布団でゆったりと眠れるようになりました。ありがとうございます。

これからもお支え下さる皆様とともに子どもたちひとりひとりに寄り添った活動を続けて参りたいと願っています。



ふかふかのお布団は気持ちよくて、カメラを向けると満面の笑顔

いっしょに遊んで、たくさん学ぼう!



購入させて頂いたカプラという積み木。
軽くて丈夫なため、とても高くまで積み上げることが出来ます。倒れても大きな音がせず、小さな子供が怖がらずに遊べて大人気です。



公園での砂場あそび



大きな段ボールハウス遊び



できることから始めよう!

子ども用の浴衣と甚平はありませんか?

中部教区 可児ミッションでは、来夏に行われる園内での「夏祭り」に向けて「子ども用浴衣と甚平の寄付」を募っています。この行事で子ども達が日本の文化に触れるために浴衣や甚平を着て写真を撮り、保護者の方々にもご覧いただいています。今年は準備が間に合わずスタッフが浴衣や甚平を持ち寄って行いましたが、年長さんにはサイズが合わず、残念な思いも…。

来年の夏前までには、子どもたちのサイズに合ったものを準備したいと思っていますので、どうぞご協力をお願いいたします。

必要枚数は、浴衣・甚平合わせて5、6着です。皆さまのお手元にご寄付いただけるものがございましたら、可児ミッションまでご連絡のうえ、ご送付ください。(下記詳細)

希望サイズ: 子ども用 100~120 サイズ (年少児~年長児着用)、
及び小学生サイズ。

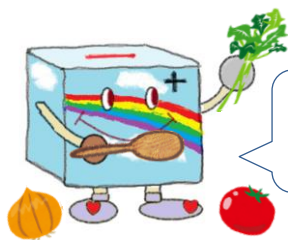
(※帯などもセットであれば助かります)

募集期間: 2016年6月末頃まで (集まり次第終了)

送付先: 〒509-0207 岐阜県可児市今渡 1012-1
可児ミッション 宛

連絡先: ☎ 0574-58-0241 担当: 赤坂 唯





「サイディアフラハ」の
報告会に行ってきました！

11月8日、ケニアから一時帰国されていた、サイディアフラハの荒川勝巳氏の報告会があり、感謝箱献金事務局から3名が参加しました。

当日はケニア料理会も催され、チャパティ、キャベジ、サモサ、ウガリ、ギゼリ、カチュンバリの6種類のケニア料理を、いくつかのグループに分かれて作りました。私達は「ギゼリ」と「カチュンバリ」に挑戦。「ギゼリ」はケニアの代表的な豆の煮込み料理で、「カチュンバリ」は赤玉ねぎ、トマト、コリアンダーを粗みじんにして塩やレモン汁を混ぜるだけのシンプルなサラダです。ケニア料理の味付けは塩とコンソメが多いそうで、日本人にも親しめる素朴な味わいは老若男女問わず、楽しめるものでした。またケニアで食べられているものの中にはインド料理が多く、料理会のメニューにあるチャパティやチャイティーもそうですが、これはケニアがイギリスによる植民地時代に労働力として連れて来られたインド人によって伝えられたものだそうです。確かに素朴な味わいの中にもコリアンダー等の香草がふんだんに取り入れられているのは、インドの影響なのかもしれません。食後には、チャイティーを頂きながら、荒川氏から現地ケニアでの活動報告がありました。



カチュンバリ



ギゼリ

現在サイディアフラハは幼稚園と小学校を運営しており、そこには約120名の子ども達が学んでいます。荒川氏がケニアで実際に生徒とふれあっていることとして、コミュニケーション能力や理解力の不足だそうです。

これはケニアの公立学校では教えられていない情操教育の欠如が影響しているのではないかと感じ、サイディアフラハの学校では今後も読み聞かせ等の情操教育を意識したプログラムの充実を図っていききたいそうです。

また14才から成人までの男女を対象とした裁縫教室で2年間学んだ後、優秀な生徒は引き続き2011年からスタートしている縫製工房に入ることができます。ここではより高い技術の習得を目指しながら様々な布製品を製作しています。来春には、工房に1年～2年の予定で、日本人のパタンナーの方が講師として技術指導をして下さるそうで、ろうけつ染の手法を用いた子ども用のワンピースやシャツ等の製作が可能になるそうです。この日の報告会でもアフリカをモチーフにした美しいろうけつ染を施した衣類が並べられ、今後のサイディアフラハの工房製作のさらなる躍進が感じられました。将来的にはこのような製品の販売を、日本だけでなくケニア国内でも積極的に進めていくそうです。まずはケニアでもブームになっている日本食レストランで販売を試みたり、また2016年には第6回アフリカ開発会議(TICAD)がケニアで開催されるため、ケニアを訪れる多くの日本人にも布製品をアピールしていきたいそうです。

報告会の最後は荒川氏が「マライカ(天使)」という歌をスワヒリ語で披露して下さい、盛会のうちに終わりました。このような美味しく、楽しい会を企画して下さい皆様へ感謝申し上げます。

感謝箱献金事務局 スタッフ 相宮 陽子



荒川勝巳氏



教区婦人会からの声

今回は、九州教区女性の会、会長の岡本愛子さんよりのメッセージをご紹介します。教区婦人会(女性の会)でも独自に感謝箱献金としてお献げされておられますが、50%以上は日本聖公会婦人会にお送り下さっています。九州教区女性の会でも感謝箱献金の基本姿勢に則り、活動をされていることに、力づけられ、感謝箱献金事務局として共に今後も進んでいくことが出来ますよう、感謝と共にお願いいたします。

8

九州教区女性の会 感謝箱献金をお献げして

九州教区女性の会 会長 リベカ 岡本愛子

九州教区女性の会は、九州教区内を4ブロックに分けて活動しております。この会の本部は、ブロック毎に順番に引き継がれています。任期は3年。1年目はブロック毎の集会、2年目は九州教区女性の会総会、3年目は総会後代議員会を行っています。総会が3年に1度のため、傍聴者を含めて現在は1泊2日で『大会的要素』が含まれた総会となっています。

わたし達九州教区女性の会では、感謝箱献金について会員の方々の認識がまだ低い事を大変申し訳なく思っておりました。この問題の改善のために私達は2年前に行われた総会時に感謝箱献金事務局に感謝箱献金がどのように、どういう所に用いられているかの実情をそれぞれ写真を混えた説明のパネルを作っていただきました。会場に掲示し、それを見て多くの方に分かっていただいたと思います。その際には、事務局のスタッフのみな様、お世話になり有難うございました。

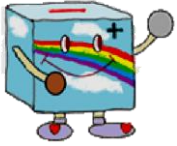
私は、初めて日聖婦総会と会長会に出席させていただき感謝箱献金事務局スタッフの皆さまのお働きをお聞きし感謝でいっぱいになりました。国内に限らず、海外まで現場に行き、繋がりを持ちながら、この献金の用途を探しておられる有様を知り深く感謝しております。

九州教区女性の会では、今年は、

- ① 九州教区との協働関係にあるフィリピン中央教区の宣教活動支援金に
- ② 毎年行っているフィリピン・ワークキャンプに九州教区から参加する人達への援助
- ③ ネパール大震災の被災地へ援助金
- ④ 九州教区東日本大震災被災者支援室の活動に
九州教区東日本大震災被災者支援室は「南の島で夏休み in 高島(長崎)」福島家族を受け入れるプログラム等を行っています。
- ⑤ 東北教区東日本大震災被災者支援室へ

少しずつではございますがこの5か所に用いています。

今は、世界中で自然災害、紛争が起こっております。苦しんでおられる方々を思い、わたし達は日々の恵みに感謝し、微力ではありますがお献げし協力したいと思っております。



感謝箱からこんにちは！

今回は中部教区婦人会役員会の皆様が「国際子ども学校」を訪問したときの様子と、感謝箱スタッフが「難キ連」の面会支援に参加したときの様子をご報告します。

国際子ども学校（ELCC）

10月20日、愛知県尾張旭市の同校を訪問。9時30分、マイクロバスで子ども達10名到着。10時、お絵かき（年少～年長）。10時40分、日本語。かな文字とその意味を教師が音読（年中～年長）。男児1名がかなの書き取りをする様子を見る。続いて主任教師のネストール先生のお話を聞く。ELCCは在日フィリピン人の学校として、1998年にスタートし、18年目を迎えた。250名の卒業生の半数が帰国し、半数が日本に居住している。現在、卒業生の子どもも学校に来ている。総数16名。待機児童数名。目下、子ども達は11月22日開催の“日本のうたごえ祭典 in 愛知（ぞうれっしゃ5000人合同合唱）”に向けて猛練習中。



ELCCを主催している名古屋学生青年センター職員ちかざわよしこの近澤淑子さんは、「ELCCは日本語に力を入れており、日本の公立学校に就学する前に日本語を学ぶことにより、学校にスムーズに入るための準備になっている。また、フィリピン人としてのアイデンティティを大切にする上でも、フィリピンの文化や英語を学んでいる。月謝を払う家庭は以前に比べて増えているが、払えない家庭もあり、感謝箱献金はそのような子ども達の学びに大いに役立っている。」と話していました。

報告者：中部教区婦人会 会長 守本 弘子

難キ連（難民・移住労働者問題キリスト教連絡会）

9月12日、東京入国管理局（品川入管）に難キ連代表佐藤直子さん、横浜教区社会委員や信徒、司祭、聖職候補生、北関東教区の司祭、合計12名で行ってきました。4人一組で3グループに分かれ被収容者、男性3人に面会。1回の面会時間は約20分～30分位です。グループによって面会内容が少しずつ違っているのを基に、佐藤直子さんが情報を整理して下さいます。

今回は3人同じ国の方ですが、民族が違い、国の民主化と共に難民として認められずに帰国できない人、民族によって置かれている立場が違うのです。

出身地、難民申請しているか、滞日期間、家族、何を支援してほしいか、体調、本国に帰りたいか、などを話してくれる内容をもとに聞き取っていきます。

アクリル板越しの面会です。家族や子どもさんも同じ面会方法で、びっくりして泣きくずれる子どもさんもおられます。

今回は、支援下さる方々からのテレフォンカード、はがき、切手、タオル等差し入れしました。感謝箱献金が、必需品の購入や、別居を余儀なくされた妻や子どもたちの支援に活かされているのを改めて知ることが出来、喜びと感謝でした。ご支援とお祈りよろしくお願い申し上げます。

感謝箱献金事務局 スタッフ 近藤 順子

感謝箱とわたし

聖公会神学生 マリア 小林 玲子

感謝箱を手にした時、2006年に私の出身教区である中部教区の婦人会大会に参加した時のことを思い出しました。長野市松代で行われたこの大会は、第二次世界大戦の爪痕の残る松代地下壕の見学と講演会が企画されていました。その交わりの中で、感謝箱の物語を聞いたのです。その時私は、それぞれの家の生活空間に置かれたこの箱に、多くの女性たちが、生活の中で自ら手にしたお金の一部をお祈りと共に入れ続けてこられたという事実が胸が熱くなったのが思い出されます。

旧約聖書を読みますと、神様は、寄留者、寡婦、孤児、旅行者に思いを寄せよ、その生命を守れ、と繰り返し言われます。

当時の社会制度において、生きることの困難のただ中に置かれていたのがこれらの人々でした。すべての人間の生命、その尊厳を尊ぶことこそ、聖書全体に響き渡る神様から私たちへのメッセージであると思います。

「ガリラヤのほとり」を読み、130年以上も前より続く感謝箱献金への思いが今、国内外の「最も助けを必要としている人々のために用いられますように」という祈りと共に、人々のもとへ届き、互いの顔の見える関係が作られていることを知り、主を賛美いたします。

私は現在聖公会神学院の1年生として、皆様の尊いお献げである被献日献金によって戴いた書籍で学んでいます。皆様のお祈りとお支えに深く感謝申し上げます。どうか主にある交わりの中で、共に生き働く者とされますように祈り続けたいと思います。



プロフィール

長野県上田市生まれ
趣味：リコーダー、散歩、美術鑑賞
愛唱歌：聖歌 260、262、391
2015年 聖公会神学院入学

できることから始めよう！

献品をお願いいたします！

難キ連では、前号に引き続き、面会支援の際にお届けする日用品の献品を募っています。皆さまのご協力をお願いします。

- * 金券（商品券、ギフト券、図書券、図書カード、クオカード、株主優待券など）
- * 未使用テレフォンカード 切手・ハガキ 便箋、封筒、ノート、文房具
- * シャンプー、リンス、石鹸、歯ブラシ、歯磨きなど（未使用品）
- * 古着（特にL、LL、XL…保管場所の都合から下記事務局までお問い合わせの上お送りください。

ご送付・お問い合わせ先

〒110-0005 東京都台東区上野1-12-6 3F（国際宝石会館）

＜難キ連＞難民・移住労働者問題キリスト教連絡会 宛

※ 事務局携帯：090-6012-8252



日本聖公会婦人会
《2016年3月11日 東日本大震災記念礼拝出席と巡礼》

日本聖公会婦人会
会長 前田 伸子

主の平和がありますように

役員会を担ってから2年半が過ぎ、その間に幾度か東北を訪問させていただきましたが、5年目を迎えた東日本の被災地では、物質的な支援よりも、被災地の現状を一人でも多くの人に知っていただき、今でもこの現状と辛苦の中にあることを忘れないでほしいと願っております。

今期の役員会は京都教区が担わせていただき、東北の地が遠いことを実感しました。

全国の教区婦人会の皆さんが東北への思いは持たれていても、教区によっては、東北へお訪ねすることが容易でないのが実情かと思いました。

そこで、東日本大震災被災者支援積立金を活用させていただき、日本聖公会婦人会の東日本大震災支援の一端として、教区婦人会の方々に呼びかけて、3名限定ではありますが被災地に行っていただくことにしました。

実際に現地に赴き、現状を知っていただき、自分たちの教区で何ができるか。どのような支援が必要か。見て、聴いて、知って、感じていただくことを目的としています。

東北主教座聖堂(仙台基督教会)で、記念聖餐式をご一緒におささげし、その後、被災後復興された旅館に宿泊して、仮設住宅にお住いの方々とお食事をともにしながらお話を伺い、親睦を深めます。翌日は南相馬から郡山に行き、郡山聖ペテロ聖パウロ教会で夕の礼拝をおささげします。

この訪問をきっかけに、其々の教区や教会での取り組みとして、被災地への関心を深め、支援の輪を広げていただけることを願っています。

被災地で今なお不安と苦しみを抱えておられる方々に、神さまの慰めと癒しが豊かにありますように、そして、神さまのみ心に叶った東北訪問になりますよう、祈りつつ準備を進めております。

どうぞ皆さまも、お祈りのうちにお覚えくださいますようお願い申し上げます。

主に感謝します。



編集後記❖

降臨節に入りました。心の準備をして主のご降誕をお迎えしたいと思います。今回はお献げ先の施設、グループの方からも現況を伝える原稿をいただきました。お互いの連絡を密にして活動が続けることを大切にしていきたいと思います。感謝箱を増刷しました。この「ガリラヤのほitori」と共に2部同封しましたが、ご連絡下されば、お送りしますので事務局まで、電話またはメールにてお申し込み下さい。男性を含めた多くの方に感謝箱献金の働きを伝えたいです。各教区婦人会のご支援とご協力を感謝するとともに今後ともよろしく願いいたします。(Y・古谷)